



外国文献紹介

幼児の潜在性脊椎閉鎖不全症の診断における MRI 検査の有用性について

O'Neill BR et al : Use of magnetic resonance imaging to detect occult spinal dysraphism in infants. J Neurosurg Pediatr 19 : 217-226, 2017

筆者らは、潜在性脊椎閉鎖不全症（OSD）の疑いで MRI 検査を行った幼児 522 例について、後ろ向き調査を行い、その有用性について検討した。その結果、122 例（23%）が OSD と診断された。OSD 122 例中 99 例（81%）には、終末線維脂肪腫あるいは脊髓円錐低位があり、他の 19%には、脂肪脊髄髄膜瘤や脂肪髄膜瘤等がみられた。骨盤背側正中部の皮膚に孤立性の小さなくぼみのある症例では、235 例中 46 例（20%）が OSD であった。そして、MRI は、骨盤背側正中部の皮膚に孤立性の小さなくぼみのある症例では、超音波検査よりも、スクリーニング検査として OSD の検出に有用と思われたと述べている。

瀬戸一彦